

平成 27 年度 大阪府立芦間高等学校 第 3 回 学校協議会

日 時 平成 28 年 2 月 13 日(土) 午後 2 時 00 分～午後 4 時 50 分

場 所 本校 2 階 会議室

構成員 <協議会委員>

河合 多賀子	P T A 会長
竹田 晴彦	守口市立第一中学校 校長
藤田 俊和	後援会会長
前川 新三郎	元 近畿大学教職教育学部 教授
宮坂 政宏	週刊教育 P R O 編集委員
山崎 裕也	スクール I E (塾) 京阪エリアマネージャー

<事務局>

高橋 雅彦	教頭
山田 英章	事務長
甲斐 徹	首席 兼 情報部長
辻 真人	首席 兼 総務文化部長
塩崎 靖子	指導教諭
若林 博行	教務主任
松本 清豪	生徒指導主事
阿野 高明	進路指導主事
槇田 純子	保健主事
岸本千都子	第 1 学年主任
飯尾 勝紀	第 2 学年主任
杉野 正	第 3 学年主任
水嶋 育美 (大西利男)	支援教育コーディネーター (校長)



- 配付資料
- 1 平成 2 7 年度学校経営計画及び学校評価
 - 2 平成 2 7 年度学校教育自己診断集計結果
 - 3 平成 2 7 年度授業アンケート集計結果
 - 4 平成 2 8 年度学校経営計画
 - 5 平成 2 8 年度の取組みについて
 - 6 「平成 2 8 年度学校経営推進費」の獲得に向けて
 - 7 I C T 実践先進校の取組みについて
 - 8 ホスピタルアート関連 2 種

内 容

- (1) 学校長挨拶
- (2) 会長挨拶
- (3) 報告

[1]資料 1 ・ 2 ・ 3 をもとに、平成 2 7 年度学校経営計画の達成状況についての説明

[2]資料 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ・ 8 をもとに、平成 2 8 年度学校経営計画等についての説明

- (4) 協議

[1]平成 2 7 年度学校経営計画の達成状況について

[2]平成 2 8 年度学校経営計画等について

<全般的な視点での満足度や肯定率、広報の在り方等について>

委 員：満足度という点で、教員と生徒とで意識の違いがある。教員は努力しているが、それが生徒には伝わっていないという感じがする。生徒の満足度が低いと思う。肯定率や満足度は、期待度に影響される。期待度が高ければ満足度は低くなるし、期待度が低ければ満足度は高くなる。満足度の規定要因は何か。校舎が新しければ満足するのか、先生が面白ければ満足するのか、満足度の規定要因を見定める必要がある。生徒の満足度や肯定率の規定要因が何かということを考えないと何とも言えない。

- 委員：他の学校では、学力の規定要因を明らかにしてカリキュラム化し、授業改善をして生徒・保護者に働きかけている。生徒の「授業満足度」が60.1%だが、学年が下がると下降している。学年が異なれば授業に関する教員の取組み状況が異なっているのか、あるいは、入学してきている生徒の実態が変わってきているのか、考えなければいけない。おそらく、生徒の実態が変わってきているのではないだろうか。実態が変わってきている生徒に対して、学校はどのように教育をしようとしているのか、どうすれば生徒の変化に対応できるのか。学校の対応が生徒の実態の変化についていけない可能性がある。
- 委員：この学校に入ってくる子どもの目的や意識、また、生徒の「授業満足度」60.1%の背景は何なのか、本当に低いのか、不満や不定的要因があるのかないのか、それらを分析しないといけない。
- 委員：学校の満足度については、1年生と2年生は2割近くの生徒が満足していない。3年生は満足していない生徒の割合が低い。これはなぜなのか。また、授業の満足度については、1年生と2年生は4割ほどが充実していないと答えているが、3年生はその割合が低い。そして、「魅力ある授業になるよう、指導方法の工夫・改善を行っている。」の肯定率は、教職員が87.8%と工夫しているのに対し、生徒は52.6%にとどまっている。このギャップは何なのか。先生たちの授業改善がなぜか生徒には届いていない。実は、このギャップが、取組みを進めているアクティブ・ラーニングの課題を表しているのではないか。つまり、授業そのものや自主学習・課題に対して、生徒が主体的な気持ちで取り組めていないからではないか。授業を改善しても、生徒が授業にのめり込むところまでは至っていない。別の側面として、1年生から自分の進路について考えさせないと、授業への姿勢は変わらない。また、家庭学習に反映していかない。どの学校も、強制力をもって、宿題を出して生徒にやらせている。生徒の家庭学習時間の実態を把握することが大切であるし、その時間の使い方がポイントとなる。
- 事務局：今年度、家庭学習時間の実態把握に向けて取り組もうとしたが、プロジェクトチームの動きが鈍く、試行的実施にとどまった。次年度、取組みをさらに進めていきたい。
- 事務局：先ほど、肯定率や満足度は、期待度に影響され、期待度が高ければ満足度は低くなるし、期待度が低ければ満足度は高くなる、という話があったが、芦間高校に対する期待、芦間高校を選ぶ生徒や保護者の基準、芦間高校に来る生徒の印象等についてはどんなものだろうか。
- 委員：高校選びには様々な要因がある。その中で、中学生の学校選び・進路指導においては、大学進学実績について他校と比べることができるような資料がほしい。保護者には、大学進学までは責任は持てないと言ってはあがあるが、各高校の大学進学実績は意識するところである。この大学に進学するなら、どれぐらいの勉強をすればよいか、1年生のときからどのような勉強すればよいか、といった情報が重要になる。芦間高校を受験する生徒については、ある程度の進学がめざせるということ、そして、距離が近いこと、周りの高校に比べると校風が落ち着いていること、高校生らしい高校生活を送ることができること等が要因となっている。
- 委員：生徒・保護者ともに、必ずしも、この学校でやりたいことがあって入学してくるとは限らない。大学進学において、ある程度のところに行けると判断してこの学校を選んでいる。他には、高校生活を楽しめる、家から近い、荒れていない、等。また、女子生徒は、看護の勉強ができることを期待している。
- 委員：キャリア教育が充実しているという点は挙げられると思う。中学校で担任が進路指導を行う段階では、自分の成績で行ける学校ということになり、点数だけで並べてしまう傾向にはある。芦間は、オープンスクール等で、子どもたちに学校をできる限りオープンに見せていただいているが、生徒にとっては「総合学科」というものが抽象的で中身がよく分からない、というのが実状であろう。兄弟や先輩がいい学校だと言って勧められた生徒には、一定の期待度及び満足度はあると思う。しかし、最後は成績で決めることが多い。他の要因としては、家から近いこと、一定のレベルの学校であること等が挙げられる。
- 事務局：大阪で総合学科ができてから約20年になり、近隣の〇〇高も総合学科になる予定だが、毎年毎年、外部の合同学校説明会等でも、「総合学科の高校とはどのような学校か」を一から説明しなければいけないというのが率直なところである。普通科

は分かるが総合学科はよく知らない、といった感じで、総合学科のことが中学校に浸透しているようで、なかなか浸透し切れていない。

事務局：総合学科は、なかなか中学校の先生に十分には伝わっていない。我々はきちんと説明していると思っているのだが、伝わっていないのが実状ではないだろうか。学校説明会や中学校訪問では、「普通科はよく分かっているが、総合学科についての理解は難しい。」という声をよく聞く。

委員：「総合学科」という名称が、全てのことを含んでいるように思えて、実態がよく分からない、という印象なのではないだろうか。中学生は「総合」という言葉が何を意味するのか、大きなイメージで捉えてしまって、分かろうとしてもなかなか分からない。私学は、コース制にして細分化し、中学生にとって分かりやすくしている。

委員：卒業生で、「芦間と言ったら、このような生徒。」というようなモデルイメージがあればPRしやすいし、中学生にとっては分かりやすいかもしれない。

委員：総合学科は、目的意識をしっかりと持たせないと、主体的な生徒が入学してこない傾向にある。〇〇高、〇〇高、〇〇高等は、目的意識を持った生徒が入学してくるよう、努力していると聞いている。

＜家庭学習時間の充実や進路意識の高揚に向けて＞

委員：不本意な気持ちで入学してくる生徒もいる。あの先生の授業が熱いとか、授業が面白いと生徒は興味を示す。

委員：以前にも言ったが、他府県では、家庭学習時間の把握のための調査を行い、努力目標を明らかにし、1年生の早い時期に、どの大学をめざすかを紙に書いて努力目標を立てて、3年間の中で個人指導を徹底的に行い、家庭学習のモチベーションを高めている学校がある。3年間の学習スケジュールをつくり、やりきらせる努力をさせる。3年間の最低学習時間を生徒に示さないといけないし、先生にも指導をやり切ってもらわないといけない。

事務局：キャリア教育という点では、職業インタビューを行うなど、1年生での「産業社会の人間」の取り組みは充実していると思っている。また、9月には大学訪問もあり、学習へのモチベーションアップに繋げている。

委員：家庭学習時間の把握のためには、ベネッセのデータを使えばいい。個別のカルテをつくり、学力の増進とリンクさせて活用すればいい。そのデータを踏まえて、例えば、関大コースとか近大コースとかを設けて、3年間で実践すべき長期的なもの、日々の小テスト等の短期的なものを生徒に示し、週末課題など短中期的なもの、中間テストなどの定期的なものと絡めて、学力の定着を図っていくのがよい。

事務局：生徒の「家庭学習の充実度」は昨年度より上昇し、「自学自習ができるように、授業などで適切な指示を出している。」と回答した（これも昨年度より上昇）教職員の努力や工夫が生徒に届いてきていると考えている。

委員：センター試験の受験者数の維持・増加という話があったが、芦間として、進学というものを明確に打ち出せれば、生徒も進学を意識すると思う。進学をめざす生徒に本校の進学実績を早めに提示し、進学するための勉強というものをより一層意識させることが大切である。

事務局：本校は、創立時に、「上級学校への進学をめざす総合学科」という打ち出しをし、これは現在も変わっていない。本校は、総合学科の中にあって、進学をミッションとしている。ただ、先ほども述べた『『総合学科』』というものの浸透」と同じく、『『上級学校への進学をめざす総合学科』』というものの浸透」もなかなか難しい。

委員：大学が学部・学科の新設に当たって文部科学省の認可を受けるためには、モデルカリキュラムをつくり、このカリキュラムの学習を経て卒業すればこの職業に就けるといったことを示さないと認可を受けることができない。大学もしっかりと出口を保証しないとイケない時代になっている。それと同じで、芦間として、モデルカリキュラムを具体的につくり、中学校に伝えてはどうか。ホームページでも、このカリキュラムの学習を経て卒業すれば、このような進路（大学）がめざせるというようなものをぜひ提示してほしい。

事務局：貴重なご意見として参考にさせていただきたい。

＜その他＞

委員：悩みがあった場合、親にも言いにくい、友だちにも言えない、そういった子どもが必ずいる。活発な子はよいが、おとなしいタイプの子どもは、先生とのコミュニケーションも取れない。一人一人の生徒をしっかりと見ていただければ、生徒はこの

学校で目的ができて明るい気持ちになれる。コミュニケーションがうまく取れない子どもをしっかりと見てほしい。そういう点で生徒の心のケアを充実させてほしい。

委員：PTAという組織ではなく、これからは、PTCAとして、地域の方々も子どもたちと関わっていただけるようなしくみをつくってほしい。学校が地域とのコミュニケーションをしっかりと取れるようにしていただければ、地域と子どもたちとのつながりができるようになる。これからは、地域とのコミュニケーションが大事だと思う。

事務局：おっしゃるとおりだと思う。生徒の心のケアは最重要課題であると認識している。その意味で、生徒の心のケアに関する通常のルーティンワークに加えて、ピア・サポートの充実、ホスピタルアートの導入等、新たな視点で生徒の心のケアの充実に寄与したい。また、地域との連携は、とても重要であり、少しずつではあるが、連携を広げつつある。来年度以降、より一層、地域との連携に励み、PTCAを意識した取組みを進めたい。

委員：アンケートの結果を見ると、先生と生徒との乖離があるが、これは仕方のないことだと思う。生徒は、わがままだし、身勝手なものである。ただ、先生と生徒との人間関係が重要であり、進路指導をどうするかということよりも、まずは、人間関係の構築をお願いしたい。生徒と先生との関係をうまくつくっていただければ、生徒の気持ちも変わり、自己診断や授業アンケートの数値もきっと上昇する。生徒は先生によって変わる。その意味で、生徒が自尊感情を持てる学校づくりをお願いしたい。

委員：学校としては、青年前期のこの多感な時期に、社会的な責任を教えることが重要である。ましてや、18歳の選挙権については、いやでもしっかりと教えていかないとけないと思う。

委員：〇〇高は、規律正しい進学校で、10年以上前から様々な新しいことに取り組んでいる。他校での実践を積極的に取り入れて、よりよい方向に学校を導いているのである。毎年、意味のある実践を行っている他府県の学校を訪問して、よいところを取り入れている。このようにしてよりよい学校づくりを推進している事例が身近にあるので参考にしてほしい。

委員：客観的な評価指標はないのか。中学校では、全国学力テストがあり、そこで評価が出る。守口市は、全国の平均を上回っているので、先生たちも学習に取り組む姿勢により一層力が入っている。客観的な評価指標があれば、先生のモチベーションは上がる。総合学科だけのテストをして、他の総合学科高校と競うとか、遅刻者数を他の総合学科高校と比較するとか、また、部活動の入部率や対外試合戦績やコンテストの結果等、他校と競い合ってはどうか。英検等の検定の2級や準2級の合格率等も競い合えばよい。客観的な評価指標があれば、結果を比較して、切磋琢磨できる。

事務局：英語については、英検もあるが、CAN-DOリストが義務付けられる。CAN-DOリストは、今後、どの教科にも取り入れるようになる予定であり、いまおっしゃられたような趣旨で活用できるかもしれない。

(5) 事務連絡

◎来年度の委員の委嘱については、後日に連絡させていただく。

